食 肉 の 需 給 に 関 す る 世 界 の 動 向

永 村 武 美

農林水産省畜産局, 千代田区 100

Recent Trend on Meat Supply and Demand in the World

Takemi Nagamura

Livestock Industry Bureau, MAFF Chiyoda 100

食肉に限らず, 世界の農産物の需給動向を的確に把握する目的は, 特定の国, 機関, そして個別の産業等により千差万別であると思う。

家畜の飼養頭数, 品種別の頭数, そして食肉の生産量等に関する統計値の羅列とそれぞれの数値の解釈論もそれなりの意義があるろうが, 本稿では, その種の記述は極力さけることにしたい。

農産物需給の動向をより正確に把握する目的を大きく分ければ, 二つあると思われる。

一つは, 国連の FAO の立場に代表されるが, 特定の物資が不足する地域あるいは国に対して, 援助物資としてあるいは生産振興計画の実施等によりその不足分を充足するための基礎資料としての役割であり, 今一つは, 農産物の貿易が, 国全体の経済あるいは食料の確保という観点から, 極めて重要な位置を占めるような国にとって必要な, 輸入あるいは輸出相手国の需給が, 自国の利益に対して与えるインパクトの程度を知るための基礎資料としての役割である。

前者については, 基本的に FAO に任せておけばよいというわけではないが, 本稿の目的とするところではない。

本稿は, 後者の立場に立つものである。要するに, わが国の食肉需給にとって, 世界の食肉需給がいかなるインパクトを有し, しかも最近の情勢の特徴は何かということを, 本会会員の大半を占められると思われる研究者の方々に理解していただくことが本稿のねらいである。

1. 我が国の食肉需給

世界の主要な食肉といえば, 通常, 牛肉, 羊肉及び山羊肉, 豚肉, そして家きん肉の四種類を意味するが, わが国の食肉需給では, これに馬肉を加えている。

これらの食肉の需給について, 最近数年の数値を示したのが表 1 である。

表 1 によると, 牛肉の需要量の約 30%, 豚肉の場合, 約 10%, 鶏肉の約 5% がそれぞれ輸入に依存するほか, 馬肉と羊肉についてはほぼ全需要量を輸入に依存していることが判る。

次いでこれらの食肉の輸入相手国別の輸入量を表 2 に示す。

この表によると牛肉については, 豪州, 米国, ニュージーランドの三カ国で総輸入量の 95% 以上をカバーするが, 中でも豪州は最大の供給国として, また米国は, 牛肉を「日米貿易不均衡のシンボル」として把える国として, われわれが最も神経を使う国である。

豚肉については, カナダ, 米国, デンマーク及び台湾が主要な輸入相手国であり, この 4 カ国で総輸入量の約 90% をカバーしている。

この量の多寡はともかく, 豚肉の輸出に対して, 非常に力を入れているのがデンマークと考えてよいと思う。というのは, 米国やカナダは, 真の意味で豚肉の輸出国とは云えぬが, デンマークの場合は, 国内生産量の約 70% 以上をベーコンや缶詰, そして部分肉として輸出するの

永 村

表 1. わが国の食肉需給動向 (枝肉ベース)

年度	区 分	牛 肉	豚 肉	馬 肉	羊 肉	鶏 肉	合 計
45	生産量	282,072	778,636	10,722	936	496,451	1,568,817
	輸出量	20	24	0	0	755	803
	輸入量	37,566	23,826	54,789	191,926	11,903	320,010
	計	319,618	802,438	65,511	192,858	507,599	1,888,024
	指数	74.9 (17)	65.1 (43)	78.6 (3)	66.2 (10)	64.8 (27)	67.0 (100)
46	生産量	301,545	848,756	10,048	681	564,241	1,725,271
	輸出量	23	17	8	0	217	265
	輸入量	71,287	40,646	67,209	298,190	30,127	507,459
	計	372,809	889,385	77,249	298,871	594,151	2,232,465
	指数	87.4 (17)	72.2 (40)	92.7 (3)	102.6 (13)	75.8 (27)	79.3 (100)
47	生産量	309,911	905,675	6,203	615	636,621	1,858,395
	輸出量	27	9	0	0	754	790
	輸入量	87,569	119,701	69,998	301,240	28,880	607,388
	計	397,453	1,025,367	76,201	301,855	664,747	2,465,623
	指数	93.2 (16)	83.2 (42)	91.5 (3)	103.6 (12)	84.8 (27)	87.5 (100)
48	生産量	235,492	1,000,100	4,210	460	695,184	1,935,446
	輸出量	23	4	0	0	1,361	1,388
	輸入量	194,546	162,221	92,034	243,110	26,493	718,404
	計	430,015	1,162,317	96,244	243,570	720,316	2,652,462
	指数	100.8 (16)	94.4 (44)	115.6 (4)	83.6 (9)	91.9 (27)	94.2 (100)
49	生産量	353,551	1,095,206	4,455	371	725,579	2,179,162
	輸出量	9	21	383	0	2,418	2,831
	輸入量	39,520	70,659	68,491	174,650	20,617	373,937
	計	393,062	1,165,844	72,563	175,021	743,778	2,550,268
	指数	92.1 (15)	94.6 (46)	87.1 (3)	60.1 (7)	94.9 (29)	90.5 (100)
50	生産量	335,448	1,023,496	5,577	236	758,923	2,123,680
	輸出量	9	3	0	0	3,204	3,216
	輸入量	91,160	208,379	77,712	291,066	27,943	696,260
	計	426,599	1,231,872	83,289	291,302	783,662	2,816,724
	指数	100.0 (15)	100.0 (44)	100.0 (3)	100.0 (10)	100.0 (28)	100.0 (100)
51	生産量	309,028	1,095,747	6,211	147	839,623	2,250,756
	輸出量	14	1	0	0	2,446	2,461
	輸入量	133,611	186,723	81,671	278,208	39,642	719,855
	計	442,625	1,282,469	87,882	278,355	876,819	2,968,150
	指数	103.8 (15)	104.1 (43)	105.5 (3)	95.6 (9)	111.9 (30)	105.4 (100)
52	生産量	370,747	1,189,020	5,838	161	943,486	2,509,252
	輸出量	13	18	0	0	2,660	2,691
	輸入量	132,214	160,905	84,466	303,510	48,486	729,581
	計	502,948	1,349,907	90,304	303,671	989,312	3,236,142
	指数	117.9 (15)	109.6 (42)	108.4 (3)	104.3 (9)	126.2 (31)	114.9 (100)
53	生産量	405,654	1,323,737	4,717	133	1,022,038	2,756,277
	輸出量	9	2	0	0	2,683	2,694
	輸入量	146,319	155,156	99,606	249,416	65,731	716,228
	計	551,964	1,478,891	104,323	249,549	1,085,086	3,469,813
	指数	129.4 (16)	120.1 (43)	125.3 (3)	85.7 (7)	138.5 (31)	123.2 (100)

(注) 1. 生産量は「食肉流通統計」による。 2. 輸入量は大蔵省関税局「日本貿易月表」を枝肉換算したものである。 3. 計は(生産量-輸出量+輸入量)である。 4. 羊肉には山羊肉を含む。鶏肉の輸出入量は家きん肉である。 5. 49年度以降沖縄を含む。 6. 指数は50年度を100とした指数であり、同欄の()は合計を100とした品目別構成比である。 7. 53年度は概数値である。

表 2. 国別輸入数量¹⁾ (1979 年: 1~12 月)

(トン)

	第 1 位	第 2 位	第 3 位	第 4 位	計
牛 肉	オーストラリア	ア メ リ カ	ニュージーランド		131,792
	101,268	24,672	3,510		
豚 肉	デ ン マ ー ク	ア メ リ カ	カ ナ ダ	台 湾	132,161
	41,097	32,657	32,536	15,315	
馬 肉	アルゼンチン	ブ ラ ジ ル	メ キ シ コ		64,503
	24,275	23,362	7,814		
羊 肉	オーストラリア	ニュージーランド			118,412
	69,821	48,229			
鶏 肉	ア メ リ カ	タ イ	中 国	台 湾	72,285
	40,802	14,187	13,229	1,550	

1) 大蔵省「日本貿易月表」から引用。いずれも通関重量であるから、全体としては、部分肉（骨ぬき）ベースと考えてよいと思われる。

みならず、わが国を部分肉の重要な輸出市場と考えている為である。

馬肉の約 70% は、ブラジルとアルゼンチンから輸入されているが、いずれの国も、馬肉を重要な輸出品として位置づけ、牛や豚におけるがごとき再生産の体制を整えているような兆しは認められていない。即ち、現在でも、ブラジルやアルゼンチンの自然牧野や山林に半野生状態で生息しているものを、捕獲して輸出に向けているのが実情であるらしい。

羊肉については、豪州とニュージーランドの二カ国で、輸入量のほぼ全量を占めている。しかも、この二カ国で世界全体の輸出量の約 70% をカバーしており、この二カ国の羊肉の生産動向が世界の貿易量を左右するといつてよい。

鶏肉を主体とする家きん肉の輸入量は、その約 70% を米国に依存し、他の国の追随を許さぬ強固な地位を確保しているが、中国やタイ等も潜在的輸出意欲は強く、輸出国としての地位は将来、益々高まってくるのではないかと考えられる。

わが国における最近の食肉需給動向と、その中で輸入に依存する部分については、主要な輸入相手国を、それぞれの食肉別に概略を説明したが、これらの食肉の輸入量のみからは、輸入それ自体の重要性と輸入をめぐる諸問題の核心に触れることは出来ない。

わが国の食肉需給に占める輸入食肉の役割を理解し、しかも個々の輸入食肉が、我が国の需給にいかなる影響を与えているかを知ることが、世界の食肉需給を俯瞰す

るための基礎的条件となるに違いない。

2. 輸入食肉の位置づけと輸入制度

繰り返して云うが、食肉の需給表に示された個々の食肉の輸入量、あるいは総需要量に対する輸入量の割合からのみ、輸入食肉の重要性を判断することは危険である。輸入量は、あくまでも結果にすぎないといっても過言ではあるまい。

即ち、輸入食肉に関する分析を行う場合に前提となるのは、第一にわが国の生産そのものをめぐる諸問題を把握すること、第二に、輸入食肉が、国産食肉とどのように競合しているかを把握すること、そして第三に、その競合性を背景としていかなる輸入制度の下で個々の食肉が輸入されているかを理解することではないかと考えられるのである。

しかしながら、個々の食肉の生産に関する諸問題を本稿で説明することは、冗漫のそしりを免れないと思うし、多くの畜産関係の雑誌等を通じて、既に会員諸兄の理解されているところであろう。したがって、本稿では、輸入食肉の位置づけ（狭義には国産ものとの競合性）とそれぞれの輸入制度に触れておきたい。

(1) 牛肉

我が国に輸入される物資は、基本的に自由化(AA)品目と未自由化品目に分類される。未自由化品目には、国際競走力の弱い農産物が多く含まれているが、牛肉はその代表格といつてよい。

牛肉は、輸入(数量)割当制度(Import Quota: IQ 制

度)の下で輸入される。即ち、1年間に輸入する数量を限定し、その範囲内で輸入を許可する制度である。

また日本の牛肉輸入割当制度は、牛肉の価格安定制度とリンクしているところに大きな特徴がある。即ち、わが国の牛肉輸入の基本的な考え方を整理すると、①国内需要に対し、国内生産では完全に充足できないので、その不足分を輸入することが建前ではあるものの、②牛肉の輸入が、国産牛肉価格に悪影響を及ぼさぬように配慮する方途として、総輸入量の約90%に相当する部分の買い入れと国内市場に対する放出は、畜産振興事業団が行うことになっている。

したがって、わが国の牛肉輸入は、国内の牛肉生産の保護、育成にとって、二重の安全弁、(輸入数量の規制と放出数量の調整)を持っているということが出来る。

輸入された牛肉を事業団が売渡す場合の価格は、国産牛肉の価格相当額であるが、輸入される牛肉の種類、即ち「高級牛肉 High Quality Beef」と称する穀物で肥育した牛肉(主として米国、カナダ産)あるいは牧草のみで肥育した牛肉(主として豪州産)によって、それぞれが国産牛肉のうち、どのクラス(乳用去勢牛や乳用雌牛の「上」、「中」、「並」、「等外」等の等級)に相当するかを決めたうえで、最低売渡し価格を定めており、入札売りの場合は、その価格以下では売渡さない仕組みとなっているのである。

国産牛肉の価格安定を図るため、和牛去勢牛の「中」と、乳用去勢牛の「中」の卸売価格を目安として定め、輸入する牛肉の種類(穀物肥育牛、牧草肥育牛、そして高級、低級部位等)及び売渡し牛肉の種類を、それぞれの競合性に基づいて畜産振興事業団が決定しているわけであるが、輸入牛肉の大部分は国産の乳用種から生産されている牛肉との競合性が強いと考えられている。

輸入牛肉の用途は、一口に大衆向けの需要を充足させるといっても、その品質、部位、そして価格によって非常に多岐にわたる。例えば、豪州産の老廃雌牛の場合は、一般の精肉店やスーパー等で販売される挽き肉材料となったり、ハンバーガーやハンバーガーの原料、あるいはソーセージの原料として利用される割合が大きいし、米国産の穀物肥育した牛のバラ肉等は、近年急激に伸長した牛丼の材料となるといった具合である。

以上のことから判るように、例えば輸入牛肉の年間輸入量が10万トンといっても、わが国の牛肉生産に与える影響は、その内容(種類、部位)によって極めて大きな差があるということなのである。その意味で、米国産の高級牛肉の輸入は、わが国の牛肉生産にとって、今後最も大きな影響を有する可能性があり、われわれが米国

の牛肉生産を注視せざるを得ない根拠となっているのである。

(2) 豚肉

豚肉は、輸入制度上は、完全に自由化されているといえるが、これも牛肉と同様に、国内価格を安定させるための措置として、差額関税制度が実施されている。

差額関税制度というのは、一口で言えば、外国の豚肉が、国内産豚肉より安い価格では流通出来ない仕組みである。即ち、これ以下の価格では輸入できないという価格を、「基準輸入価格」と称し、これが、毎年3月末に畜産審議会の答申を受けて決定される主要市場における豚枝肉「上」規格の安定上位価格(昭和55年度:764円/kg)と安定基準価格(588円/kg)の中心価格(676円/kg)と同価格に設定されている。一方、輸入される豚肉の大部分は部分肉(枝肉から骨を除去し、主な部位に分割したもの)の形状であるため、上記の676円/kgを、部分肉の歩留(0.75)で除して、901円/kgを基準輸入価格として適用するのが一般的である。

わが国の関税制度では、輸入される豚肉の「CIF価格(運賃、保険料込みの輸入価格)の8.8%か、基準輸入価格とCIF価格の差のいずれか大きい額」を関税として徴収することとなっている。

具体的な例を示すと、CIF価格が810円/kgであった場合、その8.8%は、71.3円/kgであり、基準輸入価格との差は(901-810=91円)91円/kgであるから、関税額は91円/kgとなる。また、CIF価格が、840円/kgであった場合は、その8.8%が74円/kg、差額が61円/kgとなるから、関税額は74円/kgとなる。

したがって、CIF価格が600円/kgとか700円/kg台の場合は、差額関税の額は相当大きいものとなるので、輸入業者は、関税額を極力小さくするため、定率関税部分(8.8%)と差額部分が等しくなる価格(901÷1,088≒828円/kg)を目安にして輸入しようと試みるわけである。

例えば、低級部位であるバラ肉のみを輸入した場合、CIF価格はとても828円/kgというような高い価格にはならないし、逆に高級部位であるヒレとロースばかり輸入すれば、828円/kgを超えるCIF価格となる。そこで、ヒレ、ロース、モモ、カタ、バラの五つの部位を、海外の相場を勘案して、適当に組み合わせ、その平均CIF価格が、828円/kg前後になるようにして輸入することが、現在では輸入業者の常識になっている。

こうした組み合わせによって輸入する場合、ここ数年の傾向としては、全体の60~80%程度がロースとヒレで占められるとみてよいと考えられる。要すれば、比較的

高級（高価）な部位が、相対的に低い関税で輸入されているということになるのである。本来は、枝肉をベースにした輸入を想定して作られた関税制度の盲点ということがいえよう。

このような豚肉輸入の実態に対しては、最近では、生産者側からの不満が大きくなっており、ロース、バラ、モモ及びカタ等、部分肉別に基準輸入価格を設定すべきであるとの意見が顕在化している。

さて、このような組み合わせが、単に関税の多寡のみを意識して行われているのであろうか。答は否である。

わが国に輸入される豚肉の最大の需要者は、ハム、ソーセージ等の食肉加工品製造業者であり、彼等が輸入する豚肉の大部分がハムやソーセージの原料として利用されている。これらの食肉加工品の生産量は、現在では年間 40 万トンに達しているが、ここ数年間、特に生産の伸びが著しいのが、ロースハム及びベーコンである。最近、ハム、ソーセージの製造工程は大部分機械化されているので、原料肉の品揃え、即ち、規格のそろったものに対する需要は益々強くなっているのが現状である。そこで、大手の加工メーカー等の中には、米国、カナダ及びデンマークの特定のパッカー（と畜、解体、部分肉製造を一貫して行う業者）と契約を結び、自社の製造ラインに適する規格のロースやバラ等の原料肉を輸入しているものさえいるのである。

特に、ロースを例にとると、わが国で年間に輸入するロースは、約 700 万から 800 万頭分の豚から生産された量に相当すると云われており、わが国で 1 年間にと殺される豚が、1,500 万頭であることを考えると、輸入される豚肉のわが国の需要に対する位置づけがどの程度のものか理解されよう。

要約すれば、輸入豚肉の大半は、加工用原料肉として

利用されており、現行の輸入制度上の利点（需要者にとっての）と原料肉としての品質、規格の点での優位性に基づいて、わが国の豚肉需給に大きな位置を占めるに至ったということになるうか。

(3) 羊肉及び馬肉

羊肉及び馬肉は、国内需要量の大部分を輸入に依存していることを前に述べた。したがって、輸入制度については、自由化品目であり、かつまたいずれの場合も無税である。

羊肉と馬肉の用途は、大部分が加工用原料であり、中でもハム、ソーセージの原料として利用されるものが圧倒的に多い。ハム、ソーセージを一般に食肉加工品と総称するが、これを二つのグループに分けて、需給動向を云々することが多い。

即ち、豚肉のみを主原料とするロースハムやベーコン等を「単味品」と呼んで一つのグループとし、残りを一つのグループとする分け方である。単味品以外のグループの代表格がプレスハム類、ウインナー及びフランクフルトソーセージ類である。これらの製品は、豚肉と羊肉、及び馬肉を主原料とする点が共通しており、年間約 40 万トン生産される食肉加工品のうち、プレスハムとソーセージ類を合わせて約 70% を占めている。生産量の伸び率からいえば、単味品の方が優位を保っているが、供給量については依然としてこれらの製品のウエイトが高い。

昭和 40 年代に入って、国民の食生活が洋風化してきたといわれるが、その一翼を担ってきたのが、このプレスハムとソーセージ類であるといつて過言ではないと思う。原料肉の確保という面で、極めて制約の多いわが国の食肉生産事情の下で、海外では類をみない羊肉や馬肉の有効利用を推進してきた食肉加工業界の功績はその意

表 3. 食肉加工品生産量の推移 (トン)

年 次	ロースハム等	ベーコン	プレスハム等	ソーセージ	計
35	4,866	2,223	29,310	37,801	74,200
40	7,276	2,955	59,338	66,309	135,878
45	15,930	6,520	101,160	105,840	229,450
49	33,120	16,040	101,320	129,410	279,890
50	34,242	16,934	103,650	143,092	297,924
51	38,411	18,889	116,532	160,341	334,173
52	49,575	24,507	126,894	177,876	378,852
53	56,393	28,697	124,236	176,646	385,972
54 年	71,076	33,727	114,587	179,695	399,085

(注) 農水省調査「食肉加工品生産量」

表 4. 牛の屠殺頭数

(1,000頭)

地域	国名	1971～75 平均	1976	1977	1978	1979 ¹⁾	1980 ²⁾
北 米	うち カ ナ ダ	4,293	5,420	5,321	4,724	4,100	3,850
	メ キ シ コ	4,359	5,400	5,731	6,200	6,100	6,200
	米 国	32,829	48,726	48,073	44,272	37,000	35,500
	合 計	43,219	61,561	61,254	57,539	49,640	48,166
南 米	うち アルゼンチン	10,311	13,868	14,748	16,449	15,300	14,500
	ブ ラ ジ ル	10,680	11,300	12,500	11,200	10,650	10,400
	合 計	28,111	33,669	35,257	35,922	34,196	33,581
西 欧	うち フ ラ ン ス	7,566	8,092	7,563	7,496	7,959	8,317
	西 独	5,234	5,416	5,237	5,316	5,640	5,400
	英 国	4,192	4,464	4,116	3,960	3,790	3,670
	E C 計	26,955	28,123	27,359	26,968	27,750	27,822
	合 計	33,055	34,326	33,344	32,878	33,695	33,755
東 欧	うち ポ ー ラ ン ド	4,641	5,201	4,378	4,502	4,623	4,597
	合 計	8,612	9,719	8,776	7,456	9,238	9,153
ソ ビ エ ト		28,407	38,191	36,433	37,642	37,900	38,400
ア フ リ カ		3,476	3,246	3,353	3,635	3,860	3,810
ア ジ ア	うち イ ン ド	1,673	1,711	1,723	1,737	1,750	1,780
	韓 国	310	404	472	491	523	591
	ト ル コ	2,808	3,317	3,117	2,787	2,670	2,500
	日 本	1,148	1,023	1,198	1,263	1,240	1,260
合 計		7,536	8,171	8,533	8,478	7,238	7,232
オセ ア ニア	うち オーストラリア	7,606	11,434	12,700	12,346	9,955	8,500
	ニュージーランド	2,975	3,868	3,570	3,596	3,202	2,950
	合 計	10,581	15,302	16,270	15,942	13,157	11,450
総 計		162,997	204,185	203,220	199,492	188,924	185,547

1) 暫定値 2) 予測値

(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

味で賞讃に値しよう。

ところが、この数カ年の傾向として、これらの羊肉や馬肉を主原料とした製品の需要が伸び悩んでいる一方で、豚肉を原料とした単味品は急激に伸長していることが指摘されている。即ち、高級品に対する嗜好が伸びていることと、競合する食肉製品の種類が多様化したことあるいは多種多様な外食産業の伸長がその背景にあるのではないかということだ。

しかも、この傾向を助長する要因として、この数年間、豚肉の生産が過剰気味で、価格も比較的低位安定で推移していることと、需給の逼迫による羊肉と馬肉の

海外価格の高騰が挙げられよう。

したがって、業界としては、今後羊肉及び馬肉を主原料とした製品に対する需要がこれ以上伸びることはないとする見方が支配的になっているようだ。しかしながら、消費者の選好からみた食品の需給と離れて、安全保障の観点からみた食料の確保という意味では、今まで築いてきたオセアニア及び南米の羊肉及び馬肉資源の輸入と有効利用に関する実績を、長期的な視野からみて、どの程度確保すべきかという点を検討する余地は十分にあるのではないと思われる。

(4) 家きん肉

食肉の需給に関する世界の動向

表 5. 豚の屠殺頭数

(1,000頭)

地域	国名	1971~75 平均	1976	1977	1978	1979 ¹⁾	1980 ²⁾
北米	うちカナダ	10,235	8,969	9,077	10,027	12,100	12,800
	米 国	82,480	74,959	78,442	78,417	90,240	95,400
	合 計	99,940	91,360	95,360	96,529	110,596	116,481
南米	うちブラジル	12,360	14,450	15,000	17,000	15,000	18,000
	合 計	20,962	23,147	23,554	25,589	24,472	27,618
西欧	うちデンマーク	11,238	10,604	11,064	12,068	13,400	14,300
	西 独	31,374	32,901	34,450	36,254	37,700	37,500
	オランダ	10,010	10,987	11,439	12,530	13,000	13,200
	英 国	14,828	13,498	14,196	13,764	14,647	14,100
	EC 計	101,784	104,504	109,315	114,522	120,717	120,870
	合 計	125,145	130,817	137,567	144,462	151,908	153,364
東欧	うちハンガリー	8,343	8,062	8,100	8,200	8,200	8,400
	ポーランド	19,054	17,887	16,585	19,874	20,720	21,549
	合 計	45,770	45,344	45,330	50,618	50,320	51,349
	ソビエト	67,527	57,653	61,259	67,299	70,000	70,000
	アフリカ	1,708	1,667	1,718	1,697	1,611	1,589
アジア	うち台湾	4,804	5,482	6,141	6,100	6,300	6,200
	韓 国	1,820	2,293	2,350	3,010	3,941	3,781
	日 本	14,029	14,277	16,075	17,439	19,200	20,500
	合 計	30,139	32,461	33,567	36,991	41,423	43,473
オセニア	うちオーストラリア	3,950	3,384	3,589	3,637	3,560	3,850
	合 計	4,744	4,105	4,415	4,440	4,284	4,580
	総 計	395,935	386,554	402,770	427,625	454,614	468,454

1) 暫定値 2) 予測値

(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

家きん肉といっても、その大部分は鶏肉を意味している。輸入制度としては、全て自由化品目であるが、適用される税率が品目により若干異なる。

即ち、鶏肉のうち、「骨つきモモ肉」は、関税率が17.5%（今次「東京ラウンド」で関税率の引下げに合意：1987年に10%になるように段階的に引下げることになった）であり、それ以外のものは、20%の関税が課せられる。また、七面鳥の肉は、10%の税率が適用されている。

わが国が、昭和54年1~12月に輸入した家きん肉は72,285トンであったが、うち鶏肉が70,071トンであった。したがって、輸入される家きん肉の殆ど全てが鶏肉とみて差支えない。

輸入される鶏肉を大別すると、「骨つきモモ」、「正肉」、「丸どり」、「その他」の4つに分類される。昭和54年（1~12月）の国内需給における輸入ものの位置づけを輸入比率で示すと次のようになる。

①「正肉」の輸入比率＝14,000トン/417,000トン≒3.4%

②「骨つきモモ」の〃＝42,000/69,200 ≒60.7%

③「丸どり」の〃＝7,000/29,000 ≒24.1%

これは、主要業界を対象とした調査から推定した値であるが、特に②の「骨つきモモ」及び「丸どり」の輸入が、国内生産に対して強い影響を有していることが判らう。

当然のことながらこれらの輸入品の流通価格は、国産物の価格と比較してかなり低く、「骨つきモモ」では約

表 6. めん、山羊の屠殺頭数

(1,000頭)

地域	国 名	1971~75 平 均	1976	1977	1978	1979 ¹⁾	1980 ²⁾
北 米	うち 米 国	9,680	6,911	6,555	5,543	5,175	5,225
	メ キ シ コ	4,967	4,210	4,900	4,900	4,800	4,750
	合 計	15,137	11,555	11,785	10,708	10,233	10,250
南 米	うち アルゼンチン	7,889	8,098	8,295	8,168	8,200	8,100
	ブ ラ ジ ル	4,220	4,600	4,100	3,550	3,800	3,800
	合 計	22,246	21,605	20,365	20,372	20,282	21,260
西 欧	うち フ ラ ン ス	7,589	8,465	8,273	8,522	9,194	9,500
	英 国	12,095	12,672	11,364	11,616	11,250	11,750
	E C 計	29,021	30,519	28,801	29,702	29,835	30,775
	うち ギ リ シ ア	10,653	11,475	11,190	11,182	11,171	11,170
	ス ペ イ ン	12,961	12,743	12,754	12,433	11,400	11,650
	合 計	55,760	58,413	56,617	57,239	56,424	57,663
東 欧	うち ユーゴスラビア	5,197	5,312	4,000	5,149	5,000	5,300
	合 計	6,315	6,128	4,700	6,116	6,024	6,300
	ソ ビ エ ト	61,547	55,137	55,371	56,000	56,500	56,500
ア フ リ カ	うち 南 ア フ リ カ	9,229	10,136	9,950	10,686	11,214	11,080
	モ ロ ッ コ	5,190	4,720	5,040	5,250	5,000	5,250
	合 計	14,419	14,856	14,990	15,936	16,214	16,330
ア ジ ア	うち イ ン ド	38,831	39,792	40,107	40,458	40,600	41,500
	イ ラ ン	14,456	20,000	20,000	20,000	21,000	19,000
	ト ル コ	27,207	30,217	27,621	25,494	24,600	23,900
	合 計	81,247	90,769	88,503	86,731	86,988	85,174
オ セ ア ニ ア	うち オーストラリア	37,399	33,655	30,503	27,472	29,000	29,680
	ニュージーランド	34,825	32,630	32,403	34,100	33,496	35,020
	合 計	72,225	66,285	62,906	61,572	62,496	64,700
	総 計	328,895	324,748	315,237	314,674	315,161	318,177

1) 暫定値 2) 予測値

(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

200 円/kg の価格差があるといわれているが、裏を返せば、輸入物と国産物の末端需要の性格が異なるということで、国産物が消費者の生鮮品選好に応える反面、輸入物は安価であることに活路を求めているという一種の共存関係があるといえなくもない。

しかしながら、最近の冷・解凍技術の進歩はめざましいものがあり、今後の輸入食鶏の流通が国産の鶏肉需給に与える影響は、強まることはあっても、減少することはないとみるのが妥当ではなかろうか。

以上、「牛肉」、「豚肉」、「羊肉」、「馬肉」及び「鶏肉」の輸入と国内生産との関係について、その概要が御理解いただけたものと思う。これを踏まえたうえで、本題の世界の食肉需給の動向に入ろうと思う。

3. 食肉に関する世界の需給動向

この種の統計値については、FAO、米国農務省 USDA、及び経済協力開発機構 OECD のものが一般に用いられている。

食肉の需給に関する世界の動向

表 7. 馬の屠殺頭数

(1,000 頭)

地域	国名	1971~75 平均	1976	1977	1978	1979 ¹⁾	1980 ²⁾
北米	うちメキシコ	188	140	130	130	130	130
	合計	188	140	130	130	130	130
南米	うちアルゼンチン	277	215	245	280	290	270
	ブラジル	567	560	392	510	500	500
	合計	877	803	670	829	834	814
西欧	うちフランス	171	159	154	148	141	134
	イタリア	266	282	278	287	287	290
	EC 計	482	498	499	500	497	494
	うちスペイン	87	31	30	33	30	30
	合計	601	612	613	609	601	594
東欧	うちポーランド	133	70	78	72	74	73
	合計	137	73	80	74	76	75
アフリカ	うちモロッコ	34	21	24	24	25	25
	合計	34	21	24	24	25	25
アジア	うちトルコ	46	44	45	48	35	40
	合計	78	69	70	71	56	60
総計		1,914	1,718	1,587	1,737	1,722	1,698

1) 暫定値 2) 予測値

(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

FAO は、最近 1985 年の農産物の需給見通しを公表している。これは、国際食糧農業協会から邦訳版が既に出版されているので、本稿では割愛しようと思う。

米国農務省からは、定期的に（月刊が多い）各種の刊行物が発刊されており、最近時の世界の食肉需給を知るうえで最も有益な情報といえる。

特に、今年 2 月に公表した世界の食肉需給の 1980 年見通しは、この種の情報の中でも最新のものといえるので、その概要と需給に関する主要な諸統計値を紹介しておきたい。

この報告は、世界の 38 カ国を対象としているが、まず家畜の頭数について要約すると、

牛の飼養頭数は、主要生産国では同調的周期性があり、米国では 1979 年を底として 1980 年に僅かに増加に転じ、カナダも同様の傾向にあるものの、豪州、ニュージーランド及びアルゼンチンでは前年に引続き減少した。また、ブラジルは 1977 年から牛群の拡大が認められる一方、世界の牛肉市場の影響をあまり強く受けない

インドや EC 諸国では、安定的に推移している。また、ソ連では 1977 年以降、年率 1% の、そして東欧諸国は 0.5% の増加率を示している。

豚の飼養頭数は、同報告がカバーする国全体で、1979 年 1 月から 1980 年 1 月の間、3% の増加をみた。なおこれは、1976 年以降継続的に増加基調にある。

めん羊の飼養頭数は、1977 年に最低を記録したが、1980 年にはようやく 1975 年の水準に復帰し、アジアの主要な飼育地域を除く全ての地域で、1979 年から 80 年にかけて増加した。

山羊の飼養頭数は、殆ど変化がないものと推定されるが、馬の飼養頭数は、主に東欧諸国とソ連の減少を反映して、全体としては減少した。

次に、家畜のと殺頭数について要約すると、牛の屠殺頭数は、1976 年の 204 百万頭をピークとして減少を続け、1980 年には 187 百万頭になると見通され、特に米国、カナダ、アルゼンチン、豪州等の生産に強い周期性のある国々での減少が目立っている。（表 4 参照）

表 8. 牛 肉 生 産 量¹⁾

(1,000トン)

地 域	国 名	1971~75 平 均	1976	1977	1978	1979 ²⁾	1980 ³⁾
北 米	う ち カ ナ ダ	936	1,162	1,143	1,060	955	910
	メ キ シ コ	730	918	974	1,054	1,037	1,054
	米 国	8,255	12,166	11,845	11,283	9,932	9,616
	合 計	10,242	14,620	14,345	13,822	12,372	12,063
南 米	う ち ア ルゼンチン	2,188	2,811	2,914	3,193	2,990	2,880
	ブ ラ ジ ル	2,109	2,230	2,450	2,200	2,100	2,050
	ウ ル グ ャ イ	308	405	363	354	268	306
	合 計	5,600	6,628	6,888	6,949	6,611	6,543
西 欧	う ち フ ラ ン ス	1,613	1,799	1,652	1,658	1,791	1,880
	西 独	1,309	1,414	1,383	1,435	1,520	1,500
	英 国	1,006	1,069	1,032	1,048	1,010	980
	E C 計	6,074	6,540	6,398	6,420	6,642	6,700
	合 計	7,248	7,816	7,660	7,657	7,901	7,952
東 欧	う ち ポ ー ラ ン ド	602	806	717	709	733	746
	合 計	1,760	2,133	2,007	2,025	2,067	2,088
ソ ビ エ ト		5,578	6,152	6,406	6,590	6,510	6,510
ア フ リ カ		607	588	619	665	701	695
ア ジ ア	う ち イ ン ド	184	188	189	191	192	196
	韓 国	51	75	104	108	115	130
	ト ル コ	178	180	199	163	158	155
	日 本	301	298	361	403	405	412
合 計		921	946	1,082	1,119	1,031	1,059
オセア ニア	う ち オーストラリア	1,372	1,899	2,149	2,134	1,794	1,570
	ニュージーランド	432	628	557	549	491	465
	合 計	1,805	2,527	2,707	2,682	2,285	2,035
総 計		33,760	41,411	41,714	41,509	39,477	38,944

1) 枝肉ベース 2) 暫定値 3) 予測値

(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

豚の屠殺頭数は、1980 年には史上最高の 400 百万頭に達すると見通され、米国とブラジルの増加がそれに貢献している。(表 5 参照)

めん山羊肉の屠殺頭数は、1979 年より全体として約 1% の増加が見通されるが、豪州とニュージーランドでは 0.5% 増にとどまる。(表 6 参照)

食肉の生産量について要約すると、

牛肉の生産量は、1979 年の水準から約 50 万トン減少し、1977 年の記録的水準の 41.7 百万トンから約 2.8 百万トン減少した水準となる。地域別にみると、北米、南

米及びオセアニアで減少し、西欧、東欧及びソ連を除くアジア諸国でやや増加する。ソ連の牛肉生産量は、平均枝肉重量の低下により、屠殺頭数の増加にもかかわらず減少するものと見通される。(表 8 参照)

豚肉の生産量は、ソ連を除く殆どの国で増加する。(表 9 参照)

めん山羊肉の生産量は、全体で約 1% 増加しよう。(表 10 参照)

次に、食肉の貿易について要約すると、

赤肉(牛、豚、めん山羊及び馬肉)の貿易量は、生産

食肉の需給に関する世界の動向

表 9. 豚 肉 生 産 量¹⁾

(1,000 頭)

地域	国 名	1971~75 平 均	1976	1977	1978	1979 ²⁾	1980 ³⁾
北 米	う ち カ ナ ダ	615	533	539	620	745	785
	米 国	6,329	5,755	6,009	6,075	7,035	7,425
	合 計	7,393	6,771	7,061	7,222	8,322	8,756
南 米	う ち ブ ラ ジ ル	683	785	834	850	850	1,000
	合 計	1,228	1,354	1,404	1,415	1,473	1,627
西 欧	う ち デ ン マ ー ク	756	716	744	812	915	975
	西 独	2,349	2,423	2,483	2,618	2,730	2,710
	オ ラ ン ダ	788	889	914	993	1,040	1,060
	英 国	980	807	869	848	900	870
	E C 計	7,657	7,849	8,152	8,604	9,067	9,100
	合 計	9,420	9,819	10,269	10,820	11,380	11,504
東 欧	う ち ハ ン ガ リ ー	429	416	461	465	470	480
	ボ ー ラ ン ド	1,382	1,543	1,548	1,766	1,842	1,967
	合 計	3,581	4,125	4,237	4,552	4,520	4,664
	ソ ビ エ ト	3,792	3,053	3,480	3,727	3,656	3,515
	ア フ リ カ	87	84	86	85	82	81
ア ジ ア	う ち 台 湾	394	457	510	510	527	519
	韓 国	91	98	141	172	205	208
	日 本	939	1,056	1,169	1,284	1,400	1,500
	合 計	1,832	2,006	2,183	2,359	2,584	2,717
オセア ニア	う ち オーストラリア	197	179	192	199	204	220
	合 計	234	212	235	241	242	259
	総 計	27,567	27,423	28,956	30,423	32,260	33,122

1) 枝肉ベース 2) 暫定値 3) 予測値
(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

量の約 9%となるが、畜種によりその比率は異なり、牛肉では 10%、豚肉では 7%、めん山羊肉では 18%、そして馬肉の場合は生産量の約 2/3 に達する。(表 11, 12, 13, 14, 15 参照)

なかでも、米国、EC 諸国、及びソビエトの牛肉輸入は増加するものの、アルゼンチン・オセアニア及び西欧諸国の輸出量は減少するので、貿易の需給はややひっ迫するであろう。

一方、EC 諸国、及び東欧諸国からの豚肉の輸出は若干増加すると見通されるものの、輸入量全体は大きな変化がないと考えられるので、いくつかの国で認められる豚肉の増産は、最終的に国内消費に吸収されることとな

らう。

羊肉の貿易量については、79 年と殆ど変化はないものと考えられるが、オセアニアからの輸出量がやや増加(ソ連むけのマトン、イランむけのラム)するであろう。

馬肉に対する需要は、フランス、ベルギー、イタリア及び日本などで、依然として強いものと考えられる。

おわりに、家きん肉の生産と貿易についての 1980 年の見通しを総括すると次のとおりである。

まず、家きん肉の生産量は、全体で 4%増加し、そのうち鶏肉は 5%、七面鳥は 10%程度伸びる。米国は、鶏肉生産の約 38%を占め、更に EC 諸国、日本、及びスペインの合計で約 30%となる。七面鳥では鶏肉以上に生

表 10. めん、山羊肉生産量¹⁾

(1,000トン)

地域	国 名	1971~75 平 均	1976	1977	1978	1979 ²⁾	1980 ³⁾
北 米	う ち 米 国	256	168	159	140	133	134
	メ キ シ コ	56	56	55	55	53	52
	合 計	291	232	220	200	191	191
南 米	う ち ア ルゼンチン	134	127	132	130	132	130
	ブ ラ ジ ル	56	58	51	44	48	48
	合 計	325	303	288	288	288	295
西 欧	う ち フ ラ ン ス	135	155	154	157	169	175
	英 国	240	248	229	238	225	239
	E C 計	502	538	516	535	529	550
欧 州	う ち ギ リ シ ア	102	117	119	119	119	119
	ス ペ イ ン	144	146	144	142	125	130
	合 計	796	850	831	848	828	855
東 欧	う ち ユーゴスラビア	50	60	57	62	61	63
	合 計	185	201	192	194	195	199
ソ ビ エ ト		924	841	849	875	855	855
ア フリ カ	う ち 南 ア フ リ カ	146	161	164	176	174	175
	モ ロ ッ コ	52	54	57	59	55	59
	合 計	198	215	221	235	229	234
ア ジ ア	う ち イ ン ド	366	358	359	364	370	380
	イ ラ ン	233	380	383	377	390	350
	ト ル コ	347	384	352	326	318	309
	合 計	956	1,134	1,105	1,079	1,090	1,051
オ セ ア ニア	う ち オーストラリア	672	592	538	492	522	533
	ニュージーランド	537	513	498	498	486	530
	合 計	1,209	1,105	1,035	990	1,008	1,063
総 計		4,882	4,879	4,743	4,709	4,684	4,741

1) 枝肉ベース 2) 暫定値 3) 予測値
(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

産が特定国に集中し、生産量全体の 57%を米国、そして 30%を EC 諸国が占める。(表 16 参照)

家さん肉の貿易(輸出)量は、EC、米国及びハンガリーの三つで世界の大部分を担っており、1979 年の輸出量約 111 万トンのうち、51%が EC、21%が米国、そして 10%をハンガリーが占めた。但し、EC の輸出量の 2/3 は、EC 域内にむけられている。(表 17 参照)

以上が、米国農務省による 1980 年の食肉需給の見通しであるが、これを幾分補足するために、OECD の 1980

年以降の短期見通しから、要点をピックアップしてみると、以下のとおりである。

まず、1980 年以降の短期見通しを行う場合に念頭おくべき点として、次の事柄を指摘している。

① 北米及びオセアニア諸国の肉牛生産者の意識が今後の牛群の拡大と牛肉の生産にどの程度の影響を持つのか。

② 牛肉生産の減少とその他の食肉の生産増加、そして牛肉に対する需要の軟化が、北米及びオセアニアの牛

食肉の需給に関する世界の動向

表 11. 馬 肉 生 産 量¹⁾

(1,000トン)

地域	国 名	1971~75 平 均	1976	1977	1978	1979 ²⁾	1980 ³⁾
北 米	う ち メ キ シ コ	17	11	10	10	10	10
	合 計	28	25	25	26	26	26
南 米	う ち ア ルゼンチン	54	38	38	44	46	43
	ブ ラ ジ ル	51	50	35	46	45	45
	合 計	111	93	79	97	100	97
西 欧	う ち フ ラ ン ス	52	47	46	44	40	38
	イ タ リ ア	48	53	55	56	56	57
	E C 計	116	122	124	123	120	118
	う ち ス ペ イ ン	13	5	5	5	5	5
東 欧	合 計	138	134	136	135	132	130
	う ち ポ ー ラ ン ド	30	20	22	20	22	21
東 欧	合 計	33	23	25	23	24	24
総 計		325	289	279	294	293	288

1) 枝肉ベース 2) 暫定値 3) 予測値
(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

肉相場にどの程度のインパクトを持つか。

③ 豪州における早魃の程度と、これが牛群及び羊群の飼養に与える影響の大きさ。

④ 飼料作物の生産量と価格が畜産に与える影響。

⑤ 最近の高金利が家畜の生産と食肉貿易に与える影響。

⑥ EEC 諸国の繁殖雌牛頭数がやや減少した理由とその傾向が持続するか否か。また、1980年に、繁殖豚群の規模が拡大する可能性。

⑦ 日本の乳用雌牛頭数削減計画の結果とその削減頭数に見合う肉用雌牛群の拡大があったか否か。その結果が日本の牛肉生産に与える影響は？

⑧ 日本の豚肉生産が今後どの程度まで拡大するか。豚肉の需給の不均衡（供給過剰）が、牛肉の消費と羊肉の輸入にどのような影響があるか。

⑨ 羊肉と羊毛価格の見通しに最も重要な影響を与える要因は何か。最近の牛肉相場の不安定性、一部の輸入市場の不安定性、及び経済情勢の全般的悪化等が羊肉及び羊毛価格の低下を招来すると考えてよいか。更に、その価格の低下が豪州とニュージーランドの羊群拡大の歯どめとなり得るか否か。

以上の事柄を念頭に置きつつ、最近の食肉需給の動向を分析すると、

① OECD 諸国の家畜飼養頭数は、牛、めん山羊、豚のいずれも増加傾向にあり、飼料穀物に対する需要は強まっているので、トウモロコシ及び大豆を始めとする飼料穀物は記録的な増産にもかかわらず、価格は 1979 年に降上昇を続けている。

② 牛肉生産の縮小により貿易量も縮少し、国際価格は上昇した。但し、牛肉価格は上昇したというものの、その他の食肉（豚、鶏肉）の生産増加と消費者の牛肉離れにより、牛肉価格の上昇には限界があった。また、1979 年の高金利は、牛肉の貿易にかなりのマイナスの影響を与えた。1980～81 年の OECD 諸国の牛肉生産は、牛群規模の拡大を伴いつつ減少を続けるものと見通されるが、その場合でも、④世界全体の経済事情と牛肉需要に対するその影響、⑥牛肉以外の食肉生産の動向と牛肉需要に対するその影響、⑥飼料穀物の生産と価格の動向（豪州の早魃の影響を含む）、④今後の金利水準と肉牛産業における投資に対する影響、等が不安定要因として存在する。

③ 牛肉の減産とは対象的に、OECD 諸国における豚肉及び羊肉の生産は、1979 年から 80 年にかけて増加した。しかし、豚肉の増加率は現在急激に低下している。EEC と日本、そして北米と日本の間の豚肉貿易量は増加しているが、牛肉の貿易と比較すると豚肉と羊肉の重

表 12. 牛肉の貿易量¹⁾

(1,000トン)

地域	国名	1972~76 平 均		1977		1978		1979 ²⁾		1980 ³⁾	
		輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
北 米	うち カ ナ ダ	37	102	51	89	45	102	50	80	53	80
	米 国	28	706	47	890	74	1,053	75	1,117	90	1,143
	合 計	225	810	255	981	296	1,157	289	1,199	339	1,224
南 米	うち アルゼンチン	469	—	583	—	740	—	670	—	550	—
	ブ ラ ジ ル	152	22	191	35	131	100	132	105	130	150
	ウ ル グ ァ イ	132	—	129	—	112	—	80	4	106	—
	合 計	777	54	918	92	1,007	132	902	136	811	176
西 欧	うち フ ラ ン ス	256	162	272	219	220	272	250	242	286	240
	西 独	108	275	194	268	216	247	310	240	270	240
	アイルランド	222	1	310	4	301	3	25	360	20	370
	英 国	85	415	114	580	127	599	110	565	100	575
	イ タ リ ア	8	351	14	340	15	335	25	360	20	370
	E C 計	976	1,326	1,273	1,552	1,304	1,627	1,396	1,555	1,366	1,573
	合 計	991	1,516	1,289	1,807	1,325	1,901	1,436	1,799	1,396	1,804
東 欧		180	84	207	175	223	133	238	129	241	123
ソ ビ エ ト		28	170	18	342	21	56	19	145	19	220
ア フ リ カ		39	52	37	61	31	23	42	22	30	27
ア ジ ア	うち 韓 国	—	1	—	8	—	55	—	52	—	44
	日 本	—	107	—	121	—	143	—	175	—	185
	イ ス ラ エ ル	—	22	—	30	—	36	—	44	—	36
	合 計	3	152	11	209	14	280	15	293	18	293
オ セ ア ニ ア	うち オーストラリア	733	—	1,061	—	1,131	—	1,050	—	950	—
	ニュージーランド	306	—	384	—	346	—	328	—	303	—
	合 計	1,039	—	1,446	—	1,477	—	1,378	—	1,253	—
総 計		3,283	2,837	4,181	3,667	4,393	3,680	4,318	3,721	4,107	3,867

1) 枝肉ベース、但し、生畜は除く 2) 暫定値 3) 予測値
(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

要性は小さい。但し、豚肉の増産がその他の食肉の貿易に与えた影響は大きく、中でも、①米国における豚肉の増産が北米の牛肉価格のみならず国際価格に対してもマイナスの影響を与えたこと。及び、日本の豚肉生産の増加が、加工用原料の、羊肉から豚肉へのシフトを助長した結果、日本の羊肉輸入量が激減したこと。は特筆に値する。

一方、羊肉と羊毛の価格は高位で安定しているため、豪州とニュージーランドの羊群拡大は現在もなお持続し

ているが、EEC、中東、ソ連及び日本の羊肉需要をめぐる不安定要因の存在と、経済事情の全般的退潮傾向が羊毛需要に与える負の影響を勘案すると、楽観的な見通しは特にない。ということである。

以上、米国農務省と OECD の最近における世界の食肉需給の見通しについて説明を加えてみたが、これによって、各国の食肉生産とそれぞれの食肉に対する需要が、世界の貿易量に密接な関連を持っていることが理解されたことと思う。ここで、生産と需要及び貿易との関

食肉の需給に関する世界の動向

表 13. 豚肉の貿易量¹⁾

(1,000トン)

地 域	国 名	1972～76 平 均		1977		1978		1979 ²⁾		1980 ³⁾	
		輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入
北 米	うち カ ナ ダ	46	42	46	92	56	54	82	35	70	35
	米 国	82	224	133	199	131	225	130	224	130	218
	合 計	129	271	181	296	188	288	213	273	201	268
南 米		15	4	19	6	7	5	1	6	11	6
西 欧	うち デ ン マ ー ク	554	1	530	—	565	2	680	—	740	—
	フ ラ ン ス	39	207	38	239	45	257	63	255	60	295
	西 独	19	304	35	330	34	357	45	350	30	360
	オ ラ ン ダ	431	23	514	41	549	43	560	35	575	40
	英 国	13	539	19	477	24	552	20	560	20	580
	E C 計	1,349	1,314	1,441	1,363	1,537	1,506	1,737	1,544	1,750	1,639
	うち ス ウ ェ ー デ ン	46	18	30	8	32	5	27	5	29	5
	合 計	1,410	1,411	1,487	1,409	1,594	1,581	1,797	1,634	1,814	1,697
	東 独	50	7	130	6	130	6	110	6	110	—
	ポ ー ラ ン ド	114	25	83	22	89	19	100	—	110	—
東 欧	合 計	266	68	312	55	339	46	326	32	345	31
ソ ビ エ ト		50	58	31	69	37	48	33	55	33	60
ア フ リ カ		3	1	4	1	5	1	4	1	4	1
ア ジ ア	うち 台 湾	19	—	18	—	23	—	15	—	20	—
	日 本	—	144	—	152	—	148	—	170	—	142
	合 計	25	145	23	153	24	157	18	183	25	144
オ セ ア ニ ア		9	1	2	1	3	—	3	1	4	—
総 計		1,907	1,959	2,060	1,990	2,196	2,125	2,396	2,184	2,437	2,207

1) 枝肉ベース。但し、生畜は除く 2) 暫定値 3) 予測値
(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

係を、単純な模式図で示してみると図 1. のようになろう。この図式と今までの説明を踏まえて、今後のわが国の食肉需給の動向と世界の食肉需給の動向との相互関係について述べよう。

4. わが国の食肉需給と世界の食肉需給との相互関係

わが国の食肉需給を中心に、これと関連する諸国の動きについて、その概要を説明する。

(1) 牛 肉

わが国の、今年度の牛肉生産は、乳用去勢牛の生産回復と乳用雌牛の淘汰の継続（低能力牛淘汰促進事業）に

より、乳用種部門からの生産は前年度を上回ると予想されるものの、和牛部門からの枝肉供給については、前年並みの水準にとどまると見通しており、牛肉全体としては、前年度と同程度か、やや上回る程度（40～41 万トン：枝肉ベース）となろう。

一方、牛肉の需要は、最近の景気後退や、豚肉価格の低位安定を反映して、伸び悩んでいる。但し、業務加工用需要は、ほぼ従来通りの伸びを示すものと考えられるので、全体の需要量は約 60 万トン程度となろう。その結果、年間の牛肉輸入量は前年度並の水準と考えてよいと思う。

一方、輸出国側の状況は極めて流動的な要素をはらん

表 14. めん、山羊肉の貿易量¹⁾

(1,000トン)

地 域	国 名	1972~76 平 均		1977		1978		1979 ²⁾		1980 ³⁾	
		輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入
北 米	う ち カ ナ ダ	—	23	—	14	—	17	—	22	—	23
	米 国	2	26	2	10	1	18	2	21	2	22
	合 計	2	50	2	28	1	35	2	43	2	45
南 米	う ち ア ルゼンチン	27	—	42	—	38	—	39	—	38	—
	合 計	36	6	48	2	45	—	43	—	43	—
西 欧	う ち フ ラ ン ス	—	45	1	47	1	47	1	40	1	37
	英 国	29	263	45	223	42	226	40	220	40	220
	E C 計	57	345	78	328	80	339	71	331	71	352
	合 計	58	383	79	348	84	361	72	353	72	352
東 欧		17	3	25	3	27	3	28	3	30	2
ソ ビ エ ト		—	52	—	85	—	28	—	86	—	100
ア フ リ カ		—	—	1	3	1	2	1	5	1	3
ア ジ ア	う ち イ ラ ン	—	27	—	80	—	35	—	10	—	65
	韓 国	4	7	—	—	37	41	37	42	35	40
	日 本	—	257	—	297	—	279	—	290	—	260
	合 計	10	290	9	377	42	356	43	342	44	365
オ セ ア ニ ア	う ち オーストラリア	218	—	272	—	245	—	238	—	253	—
	ニュージーランド	402	—	406	—	378	—	417	—	445	—
	合 計	620	—	678	—	623	—	655	—	698	—
総 計		743	783	842	841	823	784	843	832	889	867

1) 枝肉ベース、生畜を除く 2) 暫定値 3) 予測値
(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

でいる。

蒙州の牛肉生産は、依然として減少を続けており、国内の小売価格も高騰しているため、1人当り牛肉消費量も約40kgまで後退し（ピークは1976年の69kg）輸出可能量も前年より10万トン減少して91万トン程度と見通される。また、今年初頭に蒙州の南東部に広がった旱魃の被害は、大巾な牛肉生産にまで至らず、現在では小康状態を保っている。

一方、米国の牛肉生産も牛群の規模拡大を伴いつつも減産を続けており、80年も昨年より2~4%の減少と見込まれている。そのため、1978~79年に牛肉の価格は暴騰したため消費量も激減し、年間1人当りの牛肉摂取量は、79年はついに50kg台を割込んだ。この傾向は、豚肉の増産（79年：16%増、80年：5~6%増）及び鶏

肉と七面鳥の増産（79年：10%、80年：5%前後）、更には米国経済全体を覆う不景気及びインフレが拍車をかけているものである。（1980年の消費者物価指数の上昇率は約12%と推定されている）。こうした牛肉消費の激減が原因となって、最近ではかなりの大手パッカー（屠畜業者）が倒産する等の情報も流布されており、これが対日牛肉輸出拡大の大会唱になる恐れは十分にある。

いずれにしても、多少の輸出プレッシャーがこれらの国々から一時的にかかるとしても、基本的にはこの1~2年は、牛肉輸入に対する大きな攻勢はないものと考えてよいと思う。

(2) 豚 肉

わが国の最近の豚肉需給の不均衡は周知のとおりであ

食肉の需給に関する世界の動向

表 15. 馬 肉 の 貿 易 量¹⁾

(1,000トン)

地 域	国 名	1972~76 平 均		1977		1978		1979 ²⁾		1980 ³⁾	
		輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入
北 米	うち カ ナ ダ	13	—	15	—	16	—	16	—	16	—
	米 国 ⁴⁾	30	3	54	—	55	—	54	—	54	—
	合 計	50	3	72	—	73	—	73	—	73	—
南 米	うち アルゼンチン	47	—	38	—	44	—	46	—	43	—
	ブ ラ ジ ル	50	—	35	—	42	—	41	—	41	—
	合 計	98	—	74	—	87	—	88	—	85	—
西 欧	うち フ ラ ン ス	1	40	1	52	1	54	1	58	1	60
	オ ラ ン ダ	2	35	7	41	8	42	6	40	5	41
	E C 計	11	115	24	140	24	144	22	146	21	150
	合 計	14	123	25	145	26	149	23	152	22	156
東 欧		12	—	16	—	16	—	18	—	18	—
ア ジ ア	うち 日 本	—	79	—	80	—	96	—	92	—	95
	合 計	4	79	2	80	3	96	2	92	2	95
総 計		177	204	189	225	205	245	203	244	200	256

1) 枝肉ベース、生畜を除く 2) 暫定値 3) 予測値 4) 米国の輸出量は、馬肉以外のものを含むが、大部分は馬肉と推定されるので一括して示されている。
(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

り、豚肉の輸入がこれに拍車をかけている一つの要因であることは否定出来ない。

わが国に豚肉を輸出しているデンマーク、米国、カナダ及び台湾等でも今までのところいずれも増産基調が続いているが、米国では繁殖豚の淘汰が進み、現時点では前年の水準以下の頭数になったことが指摘されたり、台

湾のように屠殺禁止という強硬な豚肉生産抑制を実施したため、現在では価格が暴騰している等、今年的主要国の豚肉生産は極めて流動的である。

わが国の加工業界も一定量の買いつけは従来通り行うものとしながらも、今年秋以降の国産豚肉の価格低落を必至と見ており、昨年の輸入実績（正肉ベースで 13 万

図 1. 食肉の生産と需要及び貿易の相互関係を規定する主要因

表 16. 家きん肉の生産量

(1,000トン)

地域	国名	1971～75 平均	1976	1977	1978 ¹⁾	1979 ²⁾	1980 ³⁾
北米	うちカナダ 米 国	447 4,855	458 5,385	461 5,535	484 5,895	539 6,507	523 6,874
	合 計	—	6,191	6,349	6,752	7,472	7,879
南米	うちアルゼンチン ブラジル	281 389	208 604	194 698	181 858	193 1,027	210 1,227
	合 計	863	1,108	1,206	1,315	1,512	1,740
西欧 欧	うちフランス イタリア 英 国	764 815 638	865 851 732	902 864 763	963 897 783	1,013 925 818	1,038 945 848
	E C 計	3,052	3,348	3,464	3,591	3,734	3,817
	うちスペイン	582	695	735	755	785	815
	合 計	3,918	4,383	4,564	4,735	4,926	5,068
	東欧	うちハンガリー	240	291	315	332	335
	合 計	1,136	1,463	1,625	1,915	2,053	2,133
ソビエト		1,254	1,400	1,700	1,900	2,100	2,000
南アフリカ		163	258	276	279	283	291
アジア 等	うちイスラエル オーストラリア 日 本	111 175 676	146 207 839	152 219 923	141 246 1,027	152 270 1,108	156 308 1,161
	合 計	1,078	1,308	1,419	1,549	1,673	1,772
	総 計	—	16,111	17,139	18,445	20,019	20,863

1) 修正値 2) 暫定値 3) 予測値
(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。

トン) からは大巾に減少し、今年は 10 万トン内外の輸入量と見込んでいるようだ。

(3) マトン及び馬肉

基本的にみて、これらの肉の輸入量を増加させる要因は見当らない。国内需要の動向からみてもマトンと馬肉の使用量は減るであろうし、ソ連や中東諸国の買いつけも昨年同様実施されると見込まれるので現地相場が下がるとも思えない。

(4) 家きん肉

米国を除く輸入相手国の生産は殆ど縮小される傾向にあるので、輸入量が大巾に増加することはないと考えられる。

以上、極めて大ざっぱなわが国と世界の食肉需給の相互関係と今年の輸入見通しを説明したが、ここで重ねて強調したいのは、世界の食肉需給の動向が、わが国の食肉需給に年々強い影響を与えつつあるということだ。

農林水産省としては、昭和 65 年を目標とした農産物の中期需給見通しを最近公表しているが、その中で一定の自給率の向上を唱いつつも、不足分を外国からの輸入に依存せざるを得ないものとしている。

その意味でも、国内の食肉生産、特に牛肉及び豚肉生産技術の向上、流通の合理化等に加えて、広く世界に視野を広げる必要性を痛感する。会員諸兄の巾広い御支援をいただきたいことを念じて筆を置きたい。

食肉の需給に関する世界の動向

表 17. 家きん肉の需給 (1979 年)¹⁾ (1,000 トン)

地域	国 名	生産量	輸入量	輸出量	消費量
北 米	う ち カ ナ ダ	539	36	2	550
	米 国	6,507	—	228	6,232
	合 計	7,472	—	—	7,215
南 米	う ち ア ルゼンチン	193	8	—	202
	ブ ラ ジ ル	1,027	—	70	957
	合 計	1,512	—	—	1,476
西 欧	う ち フ ラ ン ス	1,013	22	156	870
	イ タ リ ア	925	14	3	936
	英 国	818	25	44	793
	E C 計	3,734	—	565	3,542
	う ち ス ペ イ ン	785	16	3	798
	合 計	4,926	—	—	4,782
東 欧	う ち ハ ン ガ リ ー	335	—	115	220
	合 計	2,053	—	—	1,895
ソ ビ エ ト		2,100	100		2,200
南 ア フ リ カ		283	—	—	251
ア ジ ア 等	う ち イ ス ラ エ ル	152	2	30	124
	オーストラリア	270	—	8	264
	日 本	1,108	87	3	1,172
	合 計	1,655	—	—	1,733

1) 推定値である。

(米国農務省海外農業局資料より抜粋)。